

Deen Gno
ダイジェスト版

特別対談

大学受験グノーブル代表

中山伸幸先生



Nobuyuki Nakayama

東京大学大学院人文社会系研究科

阿部公彦教授 Masahiko Abe



東京大学が求める英語力

グノーブルで手にできる英語力

大学入試、とりわけ東京大学の二次試験は「知識量」だけでは突破できない――。

英米文学研究の第一人者である阿部公彦教授と

グノーブル創設以来、多くの東大合格者を送り出してきた中山先生によるスペシャルな対談が実現。

お二人の対話から浮かび上がったのは、「読み書きの力」が持つ本質的な意味でした。(文責・編集部)

「過去問の点数」では測れない知の力

現在の受験は「タイバ・コスバ」が重視され、
大量の過去問演習を積み重ね、
試験慣れをして点数を
上げることが「合格への
正しい努力」として受
け取られがちです。しか
し、その風潮に警鐘を鳴ら
します。

「過去問を解けても「深く読む力」が
育っていない子がとても多い。文章の裏
側にある、歴史や文化の文脈に、思考が届いて
いないのでは？」(中)

たとえば「児童文学は18世紀には存在しなかった」と
いう英文があっても「18世紀Ⅱ産業革命」「産業革
命以前の西欧における市民生活は貧しく、子どもが働
き手だった」という背景に自然と思考が伸びていかな
い。

グノーブルの英文教材は、単なる受験演習の道具にと
どまりません。卒業生たちが口を揃えて「知」が凝縮
された英語教材」と語るように、授業では語彙や構文に
加え、英文の背景にある歴史や筆者の思索にまで踏み込
んだ解説が行われます。「文章を読むことは、筆者との
対話である」――その姿勢を、何よりも大切にしています。
表面的な読解には、実際に英語を使うシーンでも悪影響が

「最も困るのは、意図を読み違える」ことです。
単語の意味は辞書で調べられても、文脈が読め
なければ理解には至らない」(阿)

東大入試が一貫して「ありきたりな文章」を選ばない
のは、文脈を読む力を試すためでもあるのでしょうか。

読み書きの力が「聞く・話す」を支える
近年、スピーキング重視の流れがありますが、阿部教授
は「読み書き」と「聞く・話す」は切り離せない」と強調します。

「英語は我々にとって第二言語。しゃべる力は
「読んだり聞いたりした内容」が頭の中で処理
されて初めて出てくる。読み書きが弱いまま話
そうとしても土台がない」(阿)

実際、幼少期に海外経験のある阿部教授自身も「音声
には大人になってから苦労した」と振り返ります。しか
し、読む力がしっかりしていれば、スピーキングは「後
から」ついてくる。これはグノーブルの指導方針とも一
致します。

音読は「リズム」を身につける最強の学習法

グノーブルで長年取り組んできた「音読×精読」
の指導について話が及ぶと、阿部教授は
大きく頷きます。

「耳の記憶力というの
は実は非常に強い。
音のリズムが身につ
けば、読むスピードも



上がり、理解も深くなる」(阿)

精読で文章の構造を把握し、音読でリズムを体に染み
込ませる。この「読む×音」の相乗効果こそ、最終的に
は文章を「多面的に」理解することにつながります。

AI時代に必要なのは「AIを使いこなす力」

AIを使った英語学習の危うさを、阿部教授はこう指摘
します。

「AIを「盲信」する人と「管理する人」に分かれ
る。使いこなすには、そもそもの英語の基礎が
必要」(阿)

中山先生も「AIの指摘が正しいか判断できる目が必要」
と共感。正しく見極める「目」は、結局のところ「深く
読める力」から生まれます。

高校生になったらどんな本を読むべき？

「読む力」を育てる読書について尋ねると、阿部教授
は「2種類の読書」を推奨。

1. スラスラ読めるもの(エンタメ・啓発など)
2. 骨太なもの(古典・論考など)

四苦八苦しながら読む時間と、スイ
スイ読む時間「精読と速読」
両輪で考えるといの
ではと提案します。

英語であれば、新聞・
エッセイ・比較的読み
やすい評論などが最初の一
歩に適しているとのこと。

「文章には「音声性」がある。ときにゆっくり
咀嚼し、ときにテンポよく読み、文脈を感じ取
る感性を育ててほしい」(阿)



書く力は「型を変えて何度も書く」が鍵

英文を書く力を伸ばすために、阿部教授は型のバリ
エーションを重視します。

- ・自由英作文を書く
- ・要約する
- ・視点を変えて書く
- ・内容を分かりやすく言い換える
(パラフレーズする)



「AIに最初から書かせてはダメ。車ばかり利用
していたら足腰が弱るのと同じ。まず「自分で
書いてみる」。その上でAIに直させれば、どこ
がズレているのがよく分かる」(阿)

グノーブルでは、自由英作文の時間を多く確保してい
ます。また、英語・国語・数学を問わず、自分の答えを
自分で振り返る時間を重視。書きっぱなしにせず、まず
自ら推敲し、その上で先生の添削を受けることで、納得
感をもって振り返り、次の学びへとスムーズにつなげて
いくことができるのです。

グノーブルの指導が目指すもの

中山先生は、長年一貫して抱き続けてきた思いを語
ります。

「東京大学に入るための「点数」
ではなく、入学後に伸びてい
く「知の力」を育みたい」(中)



過去の形式に慣れ
るだけの学習では、大
学での学び、さらにそ
の先にはつながらない。
深く読む、
考える、書く――要となる力を中高の段階で
丁寧に育てることこそが、
子どもたちの未来の
伸びしろを決めるのだと。
阿部教授も強く同意します。

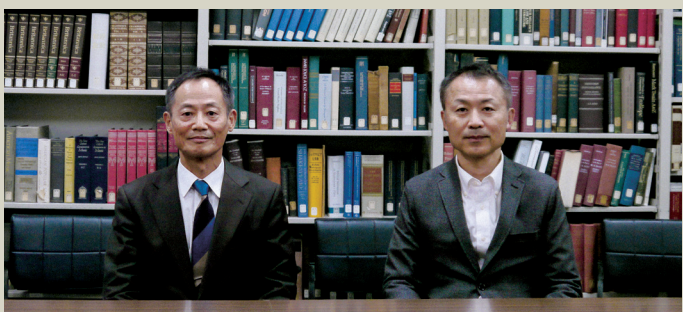
「受験で力尽きてしまう学力ではなく、
その先につながる学び方をしてほしい」(阿)

おわりに

今回の対談で繰り返し語られたのは、「読む力」
があらゆる学力の根本になるということでした。
AI時代でも揺るがない、人間にしかできない思考
の土台を築く。

受験を控える今だからこそ、点数を取るための
「作業」ではなく世界を読み解く「学び」を大切に
してほしい。

グノーブルの指導が目指すのは、受験の、その
先に伸びていく「本物の学力」です。



中山 伸幸 なかやまのぶゆき
グノーブル・グループ代表
大学受験グノーブル英語科。
受験学年を中心に英語授業を担当。

阿部 公彦 あべまさひこ
東京大学大学院
人文社会系研究科・文学部教授。
大学では英米詩を中心に教えている